巻頭言　成熟社会とストック

聖学院大学副学長
聖学院大学総合研究所
教育総合研究センター長　平　修久

人口が増加から減少に転じ、経済成長率が低位で推移し、日本は成熟社会を迎えている。成熟社会は、量的拡大ではなく質的拡充を図り、物の豊かさより心の豊かさをより重要視する社会である。そのような社会においては、これまでの蓄積であるストックの一つである地域資源を再評価・再発見し、維持・保全、あるいは有効活用することが重要となる。

地域資源には、自然の恵みと人間の営みが生み出したものがある。前者は、自然景観や動植物、自然現象、温泉などである。これらは、自然界の物質循環や再生産などにより保たれている。後者には、歴史的建造物、文化財、庭園・公園、産業遺産、災害遺構、人文的風景、飲食物といった有形のものに加えて、祭事、民族芸能、風習、言葉・表現、物語・言い伝えなど無形のものもある。無形のものは、有形のものと異なり、劣化することはないため、適切に維持、継承されれば、いつまでも活用することができる。これら無形の地域資源は、使ったらなくなるという「消費」ではなく、「鑑賞」などの表現の方がふさわしい。

歴史的に蓄積されてきた有形・無形の資源の中には、明治以降の西洋文明の吸収、経済の近代化のプロセスの中で、時代遅れと判断され、廃棄されてきたものもある。しかし、高度経済成長に陰りが見え始めた頃から、価値あるものとして見直されるようになった。

少し前の昔を見直す動きは様々なところで見られる。農業の機械化で不要になった古い農機具が、博物館などで重要な展示物として扱われている。古民家をリノベーションして、商業施設や宿泊施設として再利用している事例は各地で見られる。歴史的街並みは、明治時代や大正時代のものだけではなく、昭和時代のものまで評価されるようになり、大分県豊後高田市では、昭和の商店街をレトロのまちとして売り出し観光客を呼び込んでいる。さらには、時代遅れの遺物として打ち捨てられていた北海道の旧炭鉱関連施設が、産業遺構として脚光を浴びるようになった。放棄されたマイナスの遺産が資源というプラスの価値を持つようになった。

しかし、資源としての価値に気がつくことは簡単のようで難しい。地元住民には、見慣れているものや日常生活は特別のものではなく、そこから価値を見出すことは難しい。

そこで、改めてまち歩き、まちを見直す活動がある。富士宮市では、まち歩きを通じて、子どもの時に横丁の小さな飲食店で食べていた焼きそばを再発見し、「富士宮やきそば」としてブランド化し、多くの来街者を獲得している。

いつもどおり歩いても新たな発見は得られにくい。そこで、意識的に「ずらし」を行う。具体的には、安全な場所で目を閉じてまちの音や匂いに感覚を集中させたり、しゃがむことにより子どもが見ているまちを眺めたりする。異なる時間帯や季節にまち歩きをすることで、まちの新たな面に気づくこともある。

第三者による地域資源の発見もある。

馬籠・妻籠の住民は経済発展に乗り遅れたと思っていたところ、歴史的建造物の研究者により、残されていた中山道の宿場町の街並みが評価され、若い女性に人気のある観光地となった。北海道美瑛町は、農民にとっては見慣れた丘陵地に広がる農地の風景が、写真家により雄大な北海道らしい風景として紹介されたことから、観光客が訪れ、テレビコマーシャルのロケ地としても使われるようになった。愛媛県伊予市双海町では、ＮＨＫの番組ディレクターが瀬戸内海に沈む夕日に感動し、それがきっかけで「夕焼けプラットホームコンサート」が始まった。

再発見した地域資源は、そのままで多くの人を引き付ける魅力があるとは限らない。そのため、見つけた地域資源の魅力を高めたり、付加価値をつける努力が必要になる。「夕焼けプラットホームコンサート」は、沈む夕日を背景に鉄道駅のプラットホームで音楽を楽しむという価値を付加した好例である。

高齢化を伴う人口減少に直面している地域では、来街者の増加はまちの活性化につながる。このようなこともあり、観光産業は、今後の地方経済を支える産業の一つとして期待されている。

実際に、インバウンド観光の進展により、多くの地域で、観光産業が経済に占める割合は高まりつつある。観光産業は、宿泊業、飲食業、農林水産業、小売業、製造業、運輸業、サービス業など幅広い産業で構成された総合的な産業である。また、接客が多く、雇用機会の創出にもつながっている。

観光産業の特徴の一つに、地域資源の有効活用がある。地元の食材を使用するため、輸送の際に発生する二酸化炭素が少ない。自然や歴史・文化の蓄積を楽しむ行為が中心のため、相対的に物の消費が少なく、売上げに対する廃棄物の量が少ない。このように、環境に優しい産業と言える。そもそ

も、環境の質が低下すれば、観光産業が立ち行かなくなるので、自然環境の保全が積極的に行われている。

最近は「着地型観光」のウエートが増し、地域が観光アクティビティを提案、提供するようになってきた。そのためには、地域資源の見直し、再評価が不可欠になっている。その過程を通して、地域に対する誇りが強められている。

地域資源は特定の人・企業に独占されることない共有資源であるとともに、多くの人・企業が同時に活用できる。いわば、純粋公共財である。工夫次第で多様な活用が可能である。地域資源を活かすことは、地域を愛でることを意味し、それは、心の豊かさを深めることにつながる。成熟社会として、望ましいあり方である。

従来のフロー重視の経済は、生産された大量の物の消費をベースにしており、必然的に大量の廃棄物を発生させ、環境への負荷が大きい。リユースやリサイクルを推進しても限界がある。それに対して、観光産業のようにストック重視の経済は、物の消費に頼る部分が限られるので、新たな非再生可能資源の投入量が少なくて済むとともに、発生する廃棄物が相対的に少なく、いわば、環境に優しい。

ストックをそのまま使うのでは、変化がなく飽きが来る可能性がある。そのようなことを回避するには、その質を高めたり、工夫をこらして有効活用することが必要である。逆に、ストックを活用する中で、真に価値あるもの、よいものが将来的にも残ることになる。

翻って、研究は、一般的に、先行研究をベースにし、それらを活用して行われる。本紀要も、そのような研究の積み重ねである。研究成果のストックとして、有効に活用されることを期待したい。